

「馬鹿者」を命ず!

第二回 出会いとときめき 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

大渡薫子 (おおわたり・かおるこ)
21歳、大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ

喜多嶋翔 (きたじま・しょう)
25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた)
25歳、主人公、商店街の再生や町おこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員で入社二年目。四国・伊予南市に赴任する。

四分地恒三 (しぶち・こうぞう)
59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。

新庄誠人 (しんじょう・まこと)
50歳、伊予南市役所・地域振興課長

大渡晴美 (おおわたり・はるみ)
45歳、伊予南市長

自 分の神経のか細さに悠太は我ながら呆れるしかなかった。

昨日の夕刻、事務所兼自宅の古民家にとどりついた悠太は、引き戸に挟まれていたらしい紙切れを拾い上げた。

「俺はお前たちを認めない。一月以内で追い返してやる」

怒りに任せて書きなぐられたような乱れた文字が目飛び込んだ瞬間、悠太の背中を冷や汗が伝った。

悠太は身を隠すように古民家に入り、何度も深呼吸して膝の震えを鎮めた。それから事務所として用意された土間をそと覗き込んでみた。誰かが暗がり身を潜めているかもしれないと思っただ。人の気配はなかった。続いて恐る恐る二階上がり、二階ある畳部屋を見回した。闖入者の姿は見えなかった。

悠太はため息をつき、一階に下りて事務所のソファに腰掛けた。身じろぎもせず、しばらく周囲に耳を澄ませたが、怪しい物音はない。屋内には悠太以外は誰もいない。そう自分に言い聞かせてみたが冷汗はいつまでも

流れ落ちた。
日がすっかり暮れてから、悠太は古民家を出た。
伊予南駅まで十五分ほどの道のりを足早に行き、駅構内のコンビニで五目弁当を買った。缶ビールのロング缶とコップ酒も買い物カゴに入れた。アルコールの力を借りて早々に夢の中に逃げ込んでやるうと思っただ。

古民家に戻った悠太は五目弁当をつまみにアルコールを体に注入し、二階の畳部屋に布団を敷いて横になった。
しかし全然、眠れない。目を閉じると、俺はお前たちを認めない」という乱れた文字が臉に浮かぶ。目を開ければ暗がり何者かが潜んでいる錯覚にとられる。日付が変わるころには酔いはとうに醒め、悠太は明け方まで布団の中で悶々と寝返りを打ち続けた。

午前六時 これ以上眠りにしがみつくのを諦めた悠太は一階に下りて風呂場を探した。
一階は台所兼食堂と八畳間、事務所用の土間という間取りで、浴室は土間の隣にあった。タイル張りのレトロな内装ながら、風呂自体はガス風呂でシャワーがついている。

熱い湯を浴びながら、悠太は風呂がない大塚のアパートを思った。疲れた体を引きずって銭湯に行くのはおっくうだったけれど今はそれさえ懐かしい。麻衣と一緒に銭湯に行ったこともあった。悠太はまた泣きそうになり、こみ上げてくる切なさを必死に押しとどめた。

午前八時過ぎ、伊予南市庁舎を訪ねた。鉄筋四階建ての市庁舎は古びていて、そのためだろうか一部、外装工事のための鉄骨が組み立てていた。

ロビーの案内板で「地域振興課」の場所を確かめ二階に上がる。廊下を奥へと進み、突き当りの部屋に入った。

そこは仕切りのないフロアの端だった。地域振興課」と書かれたプレートが天井から吊り下がり、スチールのデスクが四つ、田の字形に並んでいる。

その一角で男が一人、パソコンに向かっていた。白いワイシャツに紺のネクタイという地味な格好はいかにも生真面目な地方公務員だ。年齢は五十歳前後、いや頬がこけ、しわの目立つ眼鏡顔は五十代半ばにも見える。
「地域振興課の方でしょうか」
悠太は声をかけたが、男はパソコンから目を離さない。

「私、東京の西朱雀プロジェクトから来た石打ですが」
怪訝な顔で悠太を見やった男は「あ!」と叫んで立ち上がり、椅子の背もたれにかけた背広を羽織った。

「石打くん、行きましょう」
男は悠太の脇をすり抜け、廊下を足早に歩きたした。

「どこに?」
「四階に決まっているじゃないですか。あ、私は新庄誠人、地域振興課長です」
「よろしくお願ひします」

「私、何歳に見えますか?」

「え?」

「私の年齢ですよ。何歳だと思います?」

「五十歳……ですか?」

「三十九歳です。皆さん勘違いしますが、私、三十代です。覚えておいてください」

新庄が案内したのは広い応接室だった。

四人掛けのソファと重厚な一人用のソファが二つずつ大きな木のテーブルを取り囲んでいる。一方の壁には伊予南市の地図がかかかれ、その向かいの壁には伊予南市の空撮写真が何枚も掲示されていた。

なぜ応接室に案内されたのか悠太にはわけがわからなかった。もしかして誰かに引き合わせられるのだろうか。そう思ったのと同時にドアが開き、白いスカートスーツを着た大柄な女性が応接室に入ってきた。

年齢は四十代半ばだろう。わずかに脱色したセミロングの髪型が目鼻立ちのはっきりした顔によく似合っている。悠太はこの女性にどこかで会ったような気がした。
「市長の大渡晴美です。伊予南市へようこそ」

悠太は伊予南市のホームページに掲載された市長の顔写真を思い出した。どつりで会った気がしたはずだ。

大渡晴美は悠太が差し出した名刺と悠太本人の顔を交互に見比べ、「頼りない印象ね」と身も蓋もない感想を漏らした。
「本当にあなたが『まちおこし特命社員』なの?」

